

特別記事

宮原辰夫君学位請求論文審査報告

宮原辰夫君が提出した学位請求論文『イギリス支配とインド・ムスリム』（成文堂、一九九八年、本文二五二頁＋主要参考文献目録、事項・人名索引等十八頁）の構成は以下の通りである。

まえがき

序 論 先行研究の批判的検討と問題の所在

第一章 ヨーロッパ人のインド観

第二章 イギリス支配のイデオロギー

第三章 インドにおける近代イスラーム改革運動

第四章 インド大反乱をめぐるイギリスとムスリムの相克

終 論 「想像の共同体」の発見とその社会的要因

——十九世紀後半から

——十九世紀末の連合州を中心に——

結 論 ——本書の要約と今後の課題

インド近現代史では、インドの二大宗教を主軸としたヒンドゥーとイスラーム教徒双方による宗教対立は、各々の

宗派主義（Communalism）に基づいており、もはや避けられない宗教的、歴史的必然であるかのように受け止められる傾向が強い。この傾向は植民地時代から存在し、ヒンドゥーとムスリムの宗教対立は、イギリスがインドに介入する以前からのインド社会の歴史的特質と考えられていた。対立の原因は、互いに相入れない二大宗教の教義上の根本的差異に還元されて避け難い歴史的必然とされる。それが、イギリスのインド植民地分割統治と重なって、両者の対立が促進・永続化したとみなされる傾向が強い。そのような宿命論的な見方に対して、本論文は批判を投げかけることを意図している。

本論文では宿命論的な見方を「本質主義（*essentialism*）」として、そのような視点は、インド亜大陸で進行していた両教徒間の混淆・融合の歴史の実体を無視しているばかりか、両教徒はそれぞれ一枚岩的で同質的コミュニティを形成していたとする先入観に基づいていると批判する。そこで、本論文ではまず序論において、これまで「宗教対立」やインド・パキスタン分離独立と紛争の継続の歴史的起源に関する先行研究に批判的検討を加える。先行研究として筆者が選んだものは以下の通りである。

①宗教に根拠を求める説

②ムスリムの後進性に根拠を求める説

③「分割統治策」に根拠を求める説

④国民会議派の対応に根拠を求める説

⑤エリート政治過程に根拠を求める説

序論では、以上の五つの説を紹介して批判的検討を行った後、これまでの先行研究は、多かれ少なかれ、ムスリムとヒンドゥーの違いを本質主義的にみたり、あるいは違いを所与のものとみなす観点に影響されていることに加えて、時代や対象が極めて限定されており、複雑な社会・経済・政治状況を背景にして、歴史的に形成される宗教対立の展開過程が十分に論じられていないとして、各々のアプローチのメリットを認めつつも、本論文では不十分な説明だとして退けられる。

本論文は、宗派主義やそれに基づく激しい宗教対立は歴史的に所与のものと考えるのではなく、イギリスによる植民地化と近代的統治制度の導入という歴史過程のなかで、ヒンドゥーとムスリム双方によって意識的に創り上げられてきたものとする観点に立つ。よって、対立起源の説明には、「宗教対立」が最初の高揚を見せる一八七〇年代以前の一世紀余りにおよぶ社会・経済・政治状況にまで遡る必要があると主張する。本論文は、要するに、イギリスが

事実上インドの領土支配を開始するブラッシーの戦い（一七五七年）から、宗教対立が最初の高揚をみせはじめる一八七〇年代頃にかけて、(1)インドで展開されたイギリス植民地支配の動きと、その背景にあるインド観の変遷、(2)および植民地支配に対するインド・ムスリムの対応を、インドの政治・経済的状況と関連させながら、宗教・文化的な観点から歴史的に考察を試みたものである。

そして、第一章以下で宗派主義と宗教対立の創造過程をみることになる。その際、本論文が依拠する視点として、ベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」概念と、カルチャー・スタディーズのなかで多用される「他者表象」の概念が利用される。第一章と第二章ではイギリスが本格的な植民地支配を行う迄に、どのようなインド観（他者としてのインド表象）が成立し、それらがどのように植民地統治に反映されたのかを検討する。第三章と第四章ではイギリス支配に対するインド・ムスリム側の反応としての宗教・社会改革運動の展開が扱われるが、その際、インド大反乱を契機にイギリス側とインド・ムスリム側双方に生じた変化に注目しつつ、改革運動の特色を明らかにしようとする。終論では、イスラームの想像の共同体化への過程が検討される。

まず第一章では、イギリスの植民地行政官のインド観あるいはインド・イスラーム認識の源を中世ヨーロッパの時代に遡って検討する。中世ヨーロッパにおいて、東方世界「インド」は、「文明世界」（キリスト教世界）を脅かす、奇怪な異人種の住む「非文明社会」として想像されていた。しかし、十五世紀以降の「地理上の発見」は、東方世界「インド」に対する大量の情報と知識をヨーロッパにもたらしたが、そのことによってインドに対する正しい認識がもたらされることはなく、むしろ「誤謬と偏見」に基づくインド観が新たに創り上げられたに過ぎなかったことが明らかにされる。この誤謬と偏見は、後の近代のインド観にも大きな影響を与えたのである。

第二章では、中世以来のインド観とは異なる観点から、インドについて記述したフランソワ・ベルニエがヨーロッパのインド観に与えた影響が論じられる。ベルニエは『ムガル帝国誌』を著してインドの生態や土地所有形態を詳しく紹介した。それらは後にマルクスやモンテスキュー等の哲学者や思想家によってアジア社会（インド）を分析する際の重要な典拠の一つとなった。モンテスキューはベルニエの記述を土台に『法の精神』のなかで、インドの「専制政体」、私有財産の欠落した土地所有形態、ムスリムの

支配による停滞性をその特色としてあげたが、これは、十八世紀以降のイギリスのインド史家アレクサンダー・ダウやジェームス・ミル、またマウントスチュアート・エルフィンストン等にも大きな影響を及ぼし、彼らのインド史のなかに継承されていくことが詳細に論じられる。

そして、ブラッシーの戦い以後、その一〇〇年後インド大反乱を機にイギリス本国政府がインド支配に直接介入しはじめる迄には、「専制政体」で、私有財産が欠落しているムスリム支配の停滞した国というインド観（他者表象）が確立したことが明らかにされる。このようなインド観は、インド人を野蛮な怪物とみなす中世の見方が、インド人を同じ人間とみなしつつも後進的な人々としてみる見方に変わったに過ぎないが、これが、イギリスのインド植民地支配を正当化するイデオロギーとなり、植民地官僚にも多大な影響を与えたことが論じられる。第二章では、同時にイギリス本国でその当時の時代思潮であった保守主義、ロマン主義、自由主義がインド支配にどのような影響をもたらしたのかという点も分析される。

以上の二つの章で、イギリスがインドを停滞的な後進国とみなして植民地支配の正当性を確立していく過程と統治政策が明らかにされるが、第三章と第四章では、こうした

イギリスの植民地支配に対するインド・ムスリム側の反応と、その結果生まれる宗派主義と宗教対立の展開の歴史過程が明示される。第三章では、イギリスが植民地介入する十八世紀の中頃には、ムガル帝国は既に中央集権国家としての力を喪失し、帝国内部の腐敗・内紛とイギリス支配という外圧のもと「イスラームの危機」に直面していることがまず明らかにされる。次に、その危機のなかで、自分達の政治的・経済的衰退や受難の原因は、イスラームの根本的教えからの逸脱にあるに違いないとの感情が育ち、イスラームの根本原理への回帰、すなわち、イスラームの純化が叫ばれるようになる。そのことによつて内部改革を行い、そして外部からの侵略に抵抗しようとする近代イスラーム改革運動が、デリー地域のシャー・ワリーウッラーによつて開始されたことが論じられる。

ただし第三章前半では、ワリーウッラーのイスラーム改革運動は、確かにヨーロッパ支配の脅威を受けていたイスラーム諸地域に普遍的にみられた、近代イスラーム改革運動の諸潮流の一つにあたることが論じられるが、ワリーウッラーの重要な鍵概念である「タトビーク」(融合・統合)やスーフイズムに対する態度に示されるように、彼の改革思想は、明らかにアラビアで強い影響をもっていた急進的

なワツハープ派の改革思想と異なり寛容性と柔軟性に富み穏健な側面があったこと、そしてそれは、インド、デリー地域の特殊事情を反映していたことも論じられる。さらに、第三章後半ではワリーウッラー以後、インドのデリーやベンガルで展開したイスラーム改革運動について論じられる。ここではワリーウッラーの息子シャー・アブドゥル・アズィーズによる改革運動、そして預言者ムハンマドの家族の子孫といわれる家系に生まれたサイヤド・アフマド・パレールヴィーによる改革運動について言及された後、東ベンガル・ムスリムの宗教・社会改革運動であるフアラーズィー運動も扱われる。ここでもこれらの改革運動がワツハープ派の改革思想と共通性があることを認めつつも、ワリーウッラーの改革思想とも異なる点に加え、それぞれの運動の独自性が指摘される。

そして第三章後半では、こうしたデリーとベンガル地域での一連のイスラーム改革運動が、以上のように独自で独立したものであり、決して相互に連帯し全国的な政治組織に発展するものではなかったが、デリー地域とベンガル地域のムスリム双方の間に緊密な関係をつくりだす基盤を生み、ムスリムとしての自覚を彼らの間に呼び覚ましたイスラーム共同体への帰属意識を高める契機となったことが指

摘されると同時に、「純粋なイスラームへの回帰」を唱えるイスラーム改革運動は、これまで共存してきたヒンドゥーとムスリムの間の社会関係を悪化させ、さらに文化面でもヒンドゥーとムスリムの混淆・融合の傾向に水をさす結果となり、宗派主義と宗教対立の原因が生みだされたと論じられる。

第四章では、まずイギリスがインド大反乱以後、インド・ムスリムに対してヒンドゥーに対するよりも厳しい統制と弾圧を加えはじめたことが明らかにされる。インド大反乱以前のイギリス人の対インド・ムスリム態度のなかには、多数派ヒンドゥーを支配してきた征服者としての畏敬の念を抱き、同じ「啓典の民」として親近感をもち好意を示すものも少なくなかったが、十九世紀の初頭から中頃にかけて、イスラーム改革運動がムジャヒーデーイン運動のように武力闘争を展開しはじめ、その矛先がイギリスに向けられると、インド・ムスリムはイギリスのインド支配と西洋文明に真っ向から挑戦する狂信的集団である「ワッハーブの徒」として認識され恐れられるようになった。第三章で明らかにされたように、インドのイスラーム改革運動は概して穏健なものであったが、こうした認識が育ったところに生じたインド大反乱は、インド・ムスリムのイメージ

をさらに悪化させた。大反乱にはヒンドゥーが多く参加していたが、インド・ムスリムが首謀者とされヒンドゥーよりも一層激しい制裁を受けたのである。第四章では、イギリスの厳しい監視という逆境のなかで、インド大反乱で失ったイスラームの権威と地位の回復が、ムスリムの宗教・社会改革運動の目的となったことが明らかにされる。

つまり第四章では、イスラーム改革運動は、大反乱以前の宗教の純化運動に過ぎないものから、インド大反乱での敗北により、西洋の近代科学や技術、近代的教育制度などの「西洋文明の脅威」に対応するための広範な社会の近代化運動になったことが明らかにされる。しかし、その運動形態には、イギリス支配体制を積極的に支持し近代主義を標榜するアフマド・ハーンのアリーガル運動と、反イギリス的な態度を示し復古主義を掲げるデーオバンド学院の運動のように、相反する動きの存在が確認される。いずれも自らの正当性をイスラームに依拠していたが、アフマド・ハーンのイスラーム解釈は、イギリス支配の「現実世界」に「イスラーム世界」を適応させようとするものであり、それに対し、デーオバンド学院のウラマー達のイスラーム解釈は、あくまでも「イスラーム世界」に「現実世界」を適応させることに重点がおかれていた。しかし、後者も近

代文明の成果の摂取を実現するための方針を模索しながら、イギリス支配に抵抗するためあるべきイスラーム教育を求めたものであり、闇雲な復古主義ではなかったことが指摘される。

第三章、第四章が明らかにしたように、イスラーム改革運動はイギリス植民地支配開始以前に混淆・融合化していたヒンドゥーとムスリムの間の溝を深めたが、このことが、インド・イスラームの一枚岩的で同質的コミュニティの想像を一気に可能とさせたのではないことが終論で明らかにされる。つまり、そのためにはイスラーム改革運動の他に、(1)イギリスによる植民地統制制度の近代化と、そのための英語による近代的教育制度の導入、交通・通信網の整備、そして印刷物出版活動の展開と、(2)こうした社会の近代化に一早く対応して社会的・経済的地位の上昇を達成し、ムスリムの地位を脅かしたヒンドゥーの脅威が必要であったと指摘される。そこで終論では、インドでの交通・通信網・マス・メディアの発達や出版活動の展開、そしてヒンドゥーの復興運動やヒンディー語運動の急速な広がり、つまり、ヒンドゥーもムスリム同様にイギリス植民地支配下でヒンドゥーコミュニティの想像の共同体化を進めていたことが論及される。

イギリスによるインド社会の近代化は、東インド会社の本格的統治の開始に起因する。政府学校に積極的に参加し官職ポストについたヒンドゥーや、商業活動において成功するヒンドゥーが輩出した十九世紀末には、都市にヒンドゥー新中間層が形成され、こうした人々の台頭が、ヒンドゥー復興運動やヒンディー語の普及運動などを活発化させ、ヒンドゥーの台頭をムスリムに印象づける結果となった。こうした動きは、インドにおける交通・通信網やマス・メディアの発達にともない新しい世界観としてのナショナリズムの発達を生み、一八八五年十二月のインド国民会議派の設立へとつながったと論じられる。

しかし、このようなイギリスによる社会の近代化とヒンドゥーの台頭は、かつてインドの支配者として君臨したムスリムにとりヒンドゥーの脅威を意識させるものとなる。ムスリムも対抗のために、新しい教育制度の充実やウルドゥー語による大量の印刷物出版や他宗教との公開討論を通して宗教・改革運動を継続して多くのムスリム民衆の支持を獲得し、ムスリムのイスラーム共同体への帰属意識とアイデンティティの強化に成功したのである。

以上のような議論を経て、結論で次のようにまとめられる。「宗教対立」の根源には、イギリス側の他者認識（ヒ

ンドゥーよりもインド・ムスリムに厳しい認識」とそれに基づく植民地政策、あるいは近代的西洋システムの導入があった。その結果、ヒンドゥーよりもムスリム側に地位や富の不均衡あるいは不平等感を醸成し、その不満がコミュニケーション技術の発達によって増幅された結果、宗教・改革運動がヒンドゥーとムスリムの双方にもたらされ、従来は共存・同化の傾向にあったヒンドゥーとムスリムの間に新たな緊張関係が生まれ、双方に宗教・文化的帰属意識（宗派主義）を高める運動が發展して、宗教対立が強まった。つまり、ヒンドゥーとムスリムの間の宗教対立の歴史的起源は、両宗教の根源的な違いや、イギリスによる分割統治あるいは双方の歴史的排他意識などの結果ではない。イギリスの植民地支配という歴史的状況に対して、ヒンドゥーとムスリムの双方が一方はイギリス支配のもとでの社会的上昇、他方は社会的下降を経験するという状況のなかで、各々が宗教・言語を中心として独自のコミュニティを想像することになったことが、インド全体を一つの国民国家として想像することを不可能としてしまったのである。一八八五年の国民会議派の宣言のなかで「インド帝国の全域に広がった教育の普及は目を見張るものがある。そして、通信手段があまりに多様に存在するおかげで、スイク教徒、

マラータ人、ベンガル人、マドラス人というふうに、これまで互いに見知らぬもの同士であった我々が、同じ苦しみを分かち合い、同じ理想を抱く国民として自分達を考慮するようになった」と論じられるまでになったにもかかわらずである。

以上が本論文の概要である。以下では本論文の意義と問題点について述べたい。本論文では、ヒンドゥーとムスリムの宗教対立は、イギリス植民地支配によってもたらされた西洋近代システムの導入と、それに対するムスリムの純化運動の発生に第一の根源的原因をみている。本論文では明示的に扱われていないがイギリスが持ち込んだのは、インド統治効率化のための通信・交通網や英語による統一的国民教育制度、そして出版資本主義だけでなく、統一的支配の結果としての近代国民国家制度でありナショナリズムだとすればその通りである。近代国民国家システムは一般に、一民族、一言語、一文化そして一宗教によって成立すべきであるとされる傾向が強いから、その結果、ある国民国家が形成されるとき、その国家の主流民族になって自分の文化・言語・宗教を国民国家全域に押し付けることのできる立場に立つか、マイノリティとなって異文化・異言語

を押し付けられて結果的に差別されるか、あるいは同化するかの選択に迫られる弱者の立場に立つかは大きな問題となる。これは多民族地域が一つの国民国家として成立する際に重大な問題となる。それは、文化や言語は、原初的愛着の対象やアイデンティティの源泉でもあると同時に、生活の道具であり、しかも、簡単に取り替えのきかない貴重な生活必需品だからである。

イギリスによる植民地化が進み、交通・運輸、出版・通信手段等が発達すると、同じ言語、文化、宗教をもつ人々の間に同胞意識が芽生えやすくなり、インドでは宗教・言語の違いが基礎になってヒンドゥーとムスリムの宗派主義と宗教対立が惹起されたのである。宮原論文によれば、イギリス支配のもとで多数派のヒンドゥーがより早くイギリス植民地制度に適応して社会・経済的上昇に成功し、かつての支配者であるムスリムを凌駕し、インドの独立運動をリードしはじめると、社会的・経済的地位をイギリス支配のもと劣化させはじめ人口的にも少数派のムスリムは、それ迄のヒンドゥーとの混淆・融合の歴史を捨て、自らの復活のため宗派改革運動を開始し宗派主義の原因を創る。他方、ヒンドゥーはイギリス支配のもとに地位を上昇させた結果、その優位な地位を保ったまま独立を求めることにな

り、ヒンドゥー文化、言語の復活と普及を試み、自らを中心としたインド国民国家を形成しその中核にヒンドゥー文化を据えようとする。互いに、将来のインドにおいて優位な地位を守りたいために自らの宗教・言語を中核として民族（国家）を形成しようとした結果が、宗派主義と宗教対立となり一九四七年の分離独立となったのである。

よって、インドの宗派対立や宗教対立は歴史的で宿命的で本質主義的なものであるというよりは、近代化の過程のなかで新たに生み出された二つの想像の共同体の対立の結果であつたことが判明する。このように国民国家形成の歴史をみるとともに、民族形成と民族対立の発生を近代化のなかで構築されたものとみる立場は、近年のナショナリズム研究者の間では「モダニスト的な立場（近代主義者）」とされる。それに対して、民族対立や宗教対立は本源的で歴史的に古いものとする立場を「歴史主義」あるいは「原初主義の立場」と呼び、前者は社会構築主義の立場、後者を本質主義の立場であると捉えることが多い。前者の立場に立てば、現代の民族形成と民族対立の究極的原因是同質的近代国民国家制度となり、文化・言語は主観的に構築されかつ道具主義的に利用されるものとなる。

宮原君の学位請求論文は、明らかに近代主義的なナショ

ナリズムおよびエスニシティ研究の立場から書かれたものといえる。その基本にベネディクト・アンダーソンの想像の共同体論があり、その観点から、複雑怪奇なインドの宗派主義と宗教対立の起源を明らかにしようとする。そして論旨は大変明快であり、筆者の意図は十分伝わってくる。

近代主義の立場から書かれたインド・ムスリムの宗派主義と宗教コミュニティの形成に関する業績として特筆するに相応しく、インド研究者にとっても、またナシヨナリズムの理論研究者にとっても貴重な業績といつてよい。また、宗教対立が根源的なものに思われるようになったのはむしろインド独立の過程であり、対立を宿命論的に捉える必要はないということが明確になる研究である。

しかし、以上の大きなメリットにもかかわらず問題がないとはいえない。まず第一は、想像の共同体論を利用する時に陥りがちな問題である。ベネディクト・アンダーソンの想像の共同体論は、一九八三年に体系的な形で発表されて以来有名になり、日本でも初版および改訂版の翻訳も存在し、想像の共同体概念をもちだすと何でも理解できた気持ちになってしまふ。本論文でも、イギリスの支配理念とイスラームの宗教改革運動についての記述を終えて、ムスリムの宗教的ナシヨナリズムの出発が論じられた後、終論

では社会的にも地理的にも経済的にも多様なムスリムの人々が、交通・運輸、出版資本主義、近代教育制度の普及がはじまると、一気にムスリム共同体に包摂されていくかのような結論につながっている。むしろ本論文の目的が、

十九世紀後半から二十世紀の独立までの宗派対立と宗教対立の議論を主眼としているのではなく、それ以前の宗派主義と宗教対立の萌芽過程を論じようとするものだから当然ではある。とはいえ、終論の議論が図式的過ぎて説得力が弱い。今後、宗派主義がエリートから一般民衆に普及していく過程、とりわけ一九〇六年の回教徒連盟(M.L.)の結論に至るインド・ムスリムの政治運動化への軌跡をより克明に論証していくことが本論文の議論をより生かしていくために必要と思われる。有名な概念をもちだすと説明したような気になってしまふという怖さを感じられる。

第二の問題点は第一点と関連するが、筆者はムスリム共同体の想像と創造過程においてイスラーム改革運動の他に、イギリスの植民地支配と近代化の動き、そしてヒンドゥーの社会的進出と復興運動が重要な役割を果たしたと強調する割には、後二者については十分論及されていないように思われる。イスラーム共同体の想像の原因として宗教改革運動のみが強く印象に残る議論である。第三に本論文では、

ムスリムがイギリス支配のもとで支配的地位を追われていく理由として、イギリス植民地行政官のインド・ムスリムという他者に対する認識（他者表象）が重要な要因だとし、結論において今後の課題として当時のイギリスの時代思潮としての保守主義、ロマン主義、自由主義等の影響について検討を充実させたいとしているが、その緊急性が今一つはつきりしない。

それよりは、ムスリムとヒンドゥー双方の共同体の分節化の萌芽から展開過程を、とくに、中近東では多数派であるムスリムの動きとの比較を意識しつつ分析すること、また、後の独立過程におけるムスリム共同体の想像過程がヒンドゥー共同体との対立に至る歴史過程、そして、それらに与えたイギリスの統治政策の分析を充実させたほうがよいと思われる。時代思潮の研究を急ぐ理由が本論文からはつきりしなかったことを申し添えたい。第四に、先行研究の紹介と批判の部分において、日本人による先行研究への言及がほとんといことの理由説明が不充分であるとともに、各種先行研究のなかにも継承すべき点があるとすればその方向への配慮が不十分ではないかとの印象も認められる。そのことにより本研究の位置付けがより明確になったのではないか。

以上のように、検討すべき点や問題がまだ残っているとしても、本論文の学会に対する貢献は、従来から日本人によるインド・ムスリム研究が少ないだけに大きいものと思われる上に、本論文の構成と論旨の明快さから、執筆者の構想力と文章能力の高さを十分伺わせるものがあり、今後の実証的な研究の発展が十分期待できる。

よって審査員一同は、本論文によって宮原辰夫君に博士（法学）（慶應義塾大学）の学位を授与することを適当と考え、ここに報告する次第である。

平成十一年三月四日

主査	慶應義塾大学法学部教授 法学研究科委員社会学博士	関根 政美
副査	慶應義塾大学法学部教授 法学研究科委員	富田 広士
副査	防衛大学校校長 慶應義塾大学 名誉教授 法学博士	松本 三郎